(別紙様式)

都道府県番号	8
都道府県名	茨　城　県

（① ☑　② ☑　③ ☑）

Ⅰ　学校名及び規模

岩瀬町立岩瀬小学校（平成１４年４月１日現在）									
	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	３	３	３	２	２	３	１９	
児童数	９４	８５	９５	８８	７２	７８	１１	５２３	２６

Ⅱ　実践研究の概要

・主題（テーマ）

学校だからこそ学べる本物の学力を育む

－個に応じた指導のための指導体制・指導方法の工夫改善－

・テーマ設定の趣旨

子ども一人一人の力や興味・関心，心の育ちに柔軟に寄り添うことのできる指導体制や指導方法を工夫することによって，子どもの学ばずにはいられない思いをふくらませ，豊かな心で自ら学び続けていける「本物の学力」を育みたいと考え，本主題を設定した。

Ⅲ　実践研究の内容について

（ｉ）研究体制の工夫

１　教育課程編成上の配慮

①　算数科の少人数，習熟度別指導に対応するための学年統一時間割を編成した。（３学年～６学年）

②　総合的な学習の時間の興味・関心に応じた少人数指導に対応するための学年統一時間割を編成した。（３学年～６学年）

③　ＴＴ担当教師を，より大きな研究成果が期待できる学年，教科に配当した。

２　校内研究の充実

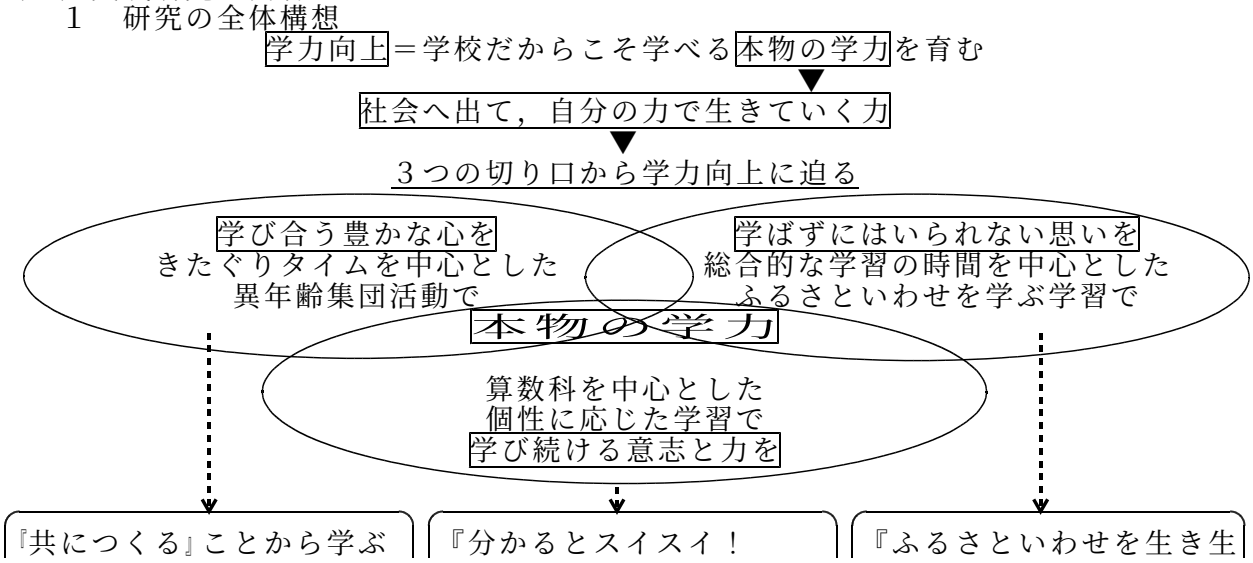
①　先進校視察や県内他地区のフロンティアスクールとの情報交換を通して，より質の高い研究となるよう努めた。

②　全学年が校内研究授業，並びに公開授業を行い，より実践的な研究となるよう努めた。

③　習熟度別指導の導入などの新しい試みについては，児童や保護者の意識調査を行い，研究の評価や次の計画に生かすようにした。

（ii）実践研究の内容

１　研究の全体構想



２　個性に応じた学習－算数科－

①　個に応じた指導体制づくり

ア　少人数指導

㈠　３学年：３学級→４学級に編成（学級担任＋ＴＴ１名で担当）

㈡　４学年：３学級→４学級に編成（学級担任＋ＴＴ１名で担当）

㈢　５学年：２学級→４学級に編成（学級担任＋ＴＴ２名で担当）

㈣　６学年：２学級→４学級に編成（学級担任＋ＴＴ２名で担当）

イ　習熟度別指導

㈠　コース選択学習の実施に向けて

・保護者の理解を得るための授業参観と説明会の実施

・コース別単元指導計画の作成

・コース別単元評価計画の作成

・コース選択のための単元レディネステストの作成

・週学習予定表の作成と学年ごとの授業担当者打ち合わせ

㈡　コース選択学習→単元ごとに保護者や教師の助言のもと子どもが自己選択

マスターコース	スモールステップで学習を進め，基礎的基本的な内容の定着に重点を置く。
トライコース	自力解決で学習を進め，一人一人の考えを話し合って深めていく。多様な練習問題にも挑戦する。
チャレンジコース	一人一人がやってみたい問題を見つけ，取り組む。日常生活に応用するなど，発展的な学習にも挑戦する。

②　学ぶ楽しさあふれる授業づくり

ア　子どもの興味・関心を喚起する教材の開発

㈠　子どもの個性で選択できる豊かな教材

㈡　驚きのある体験的な教材

㈢　日常生活を「数学的に」とらえる教材

③　基礎的基本的な学習内容の定着のために

ア　計算力を伸ばすステップアッププリントの作成，実施

イ　放課後の補充発展学習（「寄り道おまけ教室」の設置）

④　子どものやる気と自信につながる評価の工夫

ア　教師の評価観の転換

㈠　評価規準の明確化（クリアできなければ補充学習でケアする）

㈡　少人数のメリットを生かした一人一人の子どもの確かな見取りと支援

イ　子どもの自己評価力を高める

㈠　授業後の学びの振り返り

㈡　自分の力にあったコースや学習の的確な選択

ウ　習熟度別指導での評価の工夫

㈠　複数の教師による評価→補助簿の効果的な活用

㈡　パソコンによる評価管理の工夫

３　ふるさといわせを学ぶ学習－生活科・総合的な学習の時間－

①　魅力的な「人・もの・こと」との出会いの場づくり

ア　地域学習材（人材・団体・施設など）の開発と活用

㈠　教職員，保護者の情報やネットワークをフルに活用

㈡　人材バンクの作成

イ　年間を通してかかわり続け，子どもの成長を教師と共に見取っていけるＧＴの確保

ウ　子ども自身が人とつながる力を育てる

㈠　あいさつ，お話の聞き方，インタビューの仕方，電話のかけ方，インターネットやメールの活用などのスキルの獲得

②　子どもの思いが持続するような，体験と体験を結ぶ教師の支援

ア　体験への思いをふくらませる事前の授業の工夫

イ　自分の心を見つめる体験後の振り返り

ウ　一人一人の学びを分かち合う場の工夫

㈠　一人一人の感じ方の違いを大切に取り上げて

㈡　徹底して話し合う場を意図的に設定する

エ　子どもの「やってみたい心」に寄り添った柔軟な単元構成
㈠ 課題別グループに対応するための学年ＴＴの工夫
㈡ 保護者の理解と協力（休日や放課後の体験活動への参加や子どもの引率）
オ　チャレンジ！いわせタイムだよりの発行
㈠ 活動の足跡や子どもの学びを取り上げながら学年ごとに月１回程度発行し，授業で活用するとともに家庭にも配布
③　次の学びへつながる評価の工夫
ア　評価観の転換→子どもの学びの過程を重視して
イ　「育てたい力」＝評価規準の明確化
㈠ 長期のスパンで→年間を通して育てたい力…全体計画で明確に
㈡ 中期のスパンで→単元を通して育てたい力…単元計画で明確に
㈢ 短期のスパンで→１単位時間の授業で育てたい力…教師が明確にもって
ウ　子ども自身の自己評価力を育てる→ポートフォリオとしてのノートの活用
エ　子どもの「チャレンジ心」をふくらませる教師の見取りと支援
㈠ 筆まめな「赤ペン先生」に
㈡ 子どもが学ぶ過程での賞賛や励ましの声かけを
４　異年齢集団活動でのふれあい学習－特別活動－
①　異年齢集団活動＝きたぐりタイムの取り組み
ア　きたぐり班の編成→１学年から６学年までの縦割りで１８班編成
イ　きたぐりクリーンタイム→毎週水曜日：清掃活動
ウ　きたぐりタイム→毎月第３水曜日：縦割り班での遊びや行事に向けての準備，話し合いなど
エ　児童会活動，学校行事での取り組み→１年生を迎える会，春の遠足，運動会，読み聞かせ会，６年生を送る会など

（ⅲ）成果と課題
１　研究の成果
①　算数科の取り組みから
ア　習熟度別授業についての意識調査の結果から，子どもの算数学習への意欲の高まりや，学力向上の取り組みについての保護者の理解が確かめられた。
イ　自分に合った学習スタイルが保証されること（コース選択学習）によって，一斉授業の中では埋もれていた子ども一人一人の個性が生かされるようになった。そのため，苦手意識があった子が自信をもって学習するようになった。また，得意だった子がより自分の興味・関心を生かして発展的な学習に取り組めるようになった。
ウ　習熟度別指導のための指導計画や評価計画づくり，教材準備を通して，指導者同士の連携が密になり，教師一人一人の指導力が向上した。
②　総合的な学習の時間の取り組みから
ア　「やってみたい」という子どもの心がふくらみ，自力で学習を創りあげていく力（自ら学び考える力）が伸びてきた。
イ　子どもが活動を自力で切り開いていくための必要感から，取材やパソコン活用などの情報活用能力や，学びのまとめや発表などの表現力が増してきた。
ウ　地域の「人・もの・こと」とのかかわりをベースとした全体計画，学年の年間構想，単元計画が整い，教師が長いスパンでの子どもの学びを想定した授業づくりに見通しをもって当たれるようになった。
③　異年齢集団活動（特別活動）の取り組みから
ア　異年齢の子どもが活動を共にする場が増え，高学年児童のリーダーとしての自覚や資質が高まってきた。また，担任に頼りきりだった低学年児童が，上級生を手本として，掃除の仕方や活動の進め方を学べるようになってきた。
イ　縦割り班活動の日常化を通して，異年齢の相手の立場を考えて行動するようになり，相手意識をもって人間関係を結ぶ力が育ってきた。
２　今後の課題
①　カリキュラム評価と来年度の指導体制の下地づくり
ア　実践に基づいた指導体制，指導・評価計画の見直しを図る。
イ　算数科の実践を他教科にも広げられるよう，教科担任制の導入など来年度に向けての準備を進める。
②　保護者や地域への発信と協力体制の確立
ア　教科学習への学習支援ボランティア導入など，地域の教育力を最大限に生かす方法を探る。
イ　西中学校との連携を図り，９年間を見通した指導体制を探る。

（ⅳ）成果の普及方策

１　平成１４年１０月１８日（水）公開授業及び研究協議会を実施した。
２　本校ホームページ（http://www6.ocn.ne.jp/~iwasee/index.htm）で成果を紹介した。